近畿ブロック国際理解教育研究大会 大阪大会 国際理解教育分科会 報告

（司会）屋敷 長利（茨木市立山手台小学校 校長）
（記録）矢倉 良一（大阪市立宮原中学校 教諭）
（参加者）３０～３５名

Ⅰ大阪市からのレポート　　報告者 大阪教育大学附属平野小学校 教諭 島崎 貴代

1.「ホールの中でお互いに相手を見つけ、5人以上と会話してみよう。」

まず，“Nice to meet you.”“I like OKONOMIYAKI.”“Do you like OKONOMIYAKI?”“Thank you.”というやりとりの「OKONOMIYAKI」の部分を、実際に自分の好む食べ物と置き換えて会話を楽しむ，という具合に，会場全体で、英語で話す活動の体験をして盛り上がった。

2. 英会話活動する上で注意しなくてはならない点は何か？

たのしさの演出は大事。しかし、ただ楽しいだけでもいけない。指導者は，実際に目指していく「子ども像」（どういう子どもを育てたいか）という視点を持つこと。子どもたちと共に，楽しみながら体験的に言語や文化について理解を深め「コミュニケーション能力の素地を養う」ことが大切だ。

3. 指導者が意識すべき4要素

・興味関心：積極的に活動に参加し、自ら英語でコミュニケーションをとろうとする態度が育っているか。
・人間関係：ゲームを用いた活動の際、友達とかかわり，学び合うことができているか。
・表現力：自分の思いを表現し、相手に伝えることができているか。
・ことば：楽しくゲームをしながら、コミュニケーションに必要な最小限の単語やフレーズを身につけているか。
このような外国語活動を構築することが子どもたちの喜びにもつながると考えている。

Ⅱ大阪府からのレポート　　報告者 大阪府教育センター 指導主事 土居 正幸

1. イスタンブル日本人学校での経験

英語がまったく通じない。街でサンドウィッチを注文するのにも苦労し，ボディラングエッジを使うこともしばしば。日常の生活が全く進んでいかない状況で、必要に迫られてのコミュニケーションだった。言葉が通じない不安感、話しかけられたときのドキドキ感。この感覚が、初めて外国語を学ぶ子どもたちの気持ちに通じる。指導者は、「これぐらいはできるだろう」という先入観を持ってスタートするのではなく、子どもたちは「初めて外国語を学ぶ」のであるという大前提のもとに授業を進めるべきだと考える。

2. 小学校での外国語活動の実践

外国語活動の目標は、『コミュニケーション能力の素地を養う』こと。しかし，買い物で使う英語を間違わず話すことができる。ALT の話す英語を聞くことができる。のように指導者が無意識のうちに「～できる」を目標においてしまってはいないか。

「～できない」から「～できるまで」練習する。“Big Smile, Big Gesture, Big Voice”これらが本当に必要なのか。スキルを身につけることをねらいにしてしまっては、小学校外国語活動の目標『コミュニケーション能力の素地を養う』の達成は難しい。

3. ＜コミュニケーション能力の素地を養うためのキーワード＞とは

・積極的な態度：コミュニケーションをとろうとする態度、聞こうとする態度を身につけさせる。
・体験的な理解：言語や文化について体験的な理解を図る。

指導内容が必要以上に細かくなることや，活動が形式的になることのないように配慮する。“Big Smile, Big Gesture, Big Voice”より“Nice Smile, Good Gesture, Clear Voice”であるべき。

Ⅲ奈良県からのレポート　　報告者 奈良市立椿井小学校 教頭 菅原光章（実践時:奈良市立鳥見小学校）

1. 体験的に外国語に触れること、外国語活動を進めていく上での提案

・英語以外の言語や英語圏以外の文化に触れよう。
・非英語圏の ALT の活用も図ろう。
・子どもたちにとって身近なことや興味のあることから始めよう。

英語という表現方法だけではなく、世界には多様な言語や文化があることを知らせたい。また英語が必ずしも第一言語ではない国や地域からやってきた ALT の使う英語に触れることによる，子どもたちの気づきにも期待したい。

子どもたちの五感に訴え，興味をひくような内容を取り上げて外国語活動を行うことで，英語はいろいろな国の人がコミュニケーションをとるための有効な道具であるということを感じとらせたい。

2. インドネシアの方をゲストティーチャーに招いての Team Teaching の様子

コモドドラゴンについての話題やインドネシアの影絵「ワヤン」の紹介に対して、日本の影絵の紹介をした。また，実際に自分たちも影絵で使う紙人形を製作し，その過程で英語でのコミュニケーションを取ることとしたが，自分から話さないと材料がもらえないという設定は子どもたちの積極的態度を引き出した。

他にも自文化と他文化を比べることのおもしろさに気づいた。（日本の虹は７色、インドネシアは３色。信号の色は共通。世界的に共通なもの理髪店の店頭で回る青白ランプ…。）